

【資料】

推定高森町高塚横穴群出土遺物の調査報告

杉 井 健・西 貴 史
(熊本大学) (大分県立埋蔵文化財センター)

Report on Artifacts Presumed to Have Been Excavated from the Takatsuka Rock-cut Tomb Group, Takamori-machi, Kumamoto Prefecture

Takeshi SUGII (Kumamoto University)
Takashi NISHI (Oita Prefectural Center for Archaeological Research)

要旨 (Abstract)

We investigated and analyzed weapons and armor from the Kofun period, which are managed as "excavated from Soyo-machi" by the Kumamoto Prefecture Cultural Property Reference Room. As a result, it became clear that these artifacts were excavated from the Takatsuka rock-cut tomb group in Takamori-machi. It is assumed that the incorrect excavation location was labeled on the artifacts during the process of storing and managing them at the Kumamoto Prefecture Cultural Properties Reference Room. This indicates the importance of strictly managing artifacts.

キーワード (Keywords) : 熊本県、高森町、高塚横穴群、短甲、鉄鏃、弓金具、鉄刀、鉄製工具、遺物管理、出土地

1. はじめに

「蘇陽町野田先生預かり」とされる資料が熊本県文化財資料室に保管されている。それは甲冑片や鉄鏃などの古墳時代武器武具資料からなり、一見して、熊本県地域の古墳時代中・後期を考えるうえで重要な資料になりうると考えられた。しかし、それは未報告の資料であった。

私(杉井)は、古墳時代社会・政治構造の解明を研究テーマの1つとしているが、その基礎資料の1つとして、当該資料を手元において詳細な観察・分析を実施したいと熊本県教育庁文化課に依頼したところ、2021年7月から翌2022年3月までの長期借用が許可された。ここに報告するのは、その長期借用期間に実施した当該資料の調査成果である。

なお、この調査においては、当時熊本大学文学部4年生であった西貴史君(現在、大分県立埋蔵文化財センター職員)に多くの遺物の整理作業を担当してもらった。そのため、本稿は西君との分担執筆とし、それぞれの執筆箇所は文末に明記したが、読者の便のため、あらかじめここで西君の執筆箇所を示しておけば、第3章の「鉄鏃」「弓金具(両頭金具)」「鉄刀」「鉄製工具」は西君の手になるものである。(杉井)

2. 「蘇陽町野田先生預かり」として熊本県に保管されている資料の出土地

上述したように、熊本県文化財資料室には、「蘇陽町野田先生預かり」とされる資料が保管されている。その資料のなかには短甲の破片も存在し、今回、熊本県から借用した時点で、右前胴の大型破片1点、裾板の中型破片2点、その他の小型破片3点（写真1）のほか、ビニール袋に収められた小片多数が確認できた。そして、これら短甲片の細部構造を検討したところ、熊本県高森町高塚横穴群で不時発見された横刎板鉾留短甲（以下、高塚不時発見短甲と記述）〔杉井編2019：pp.62-76〕の欠損部の破片であると判断するに至った。

高塚不時発見短甲の右前胴がR Pシステムによって密封されていることもあり、「蘇陽町野田先生預かり」資料中の短甲片との厳密な接合関係は確認できていない。しかし、「蘇陽町野田先生預かり」資料中の短甲片は、その地板の形状や蝶番金具の構造、鉾の大きさ等のみならず、銹化の様子も高塚不時発見短甲に酷似していること、それにもまして、高塚不時発見短甲の欠損部にちょうど当てはまる部分の破片であることから、この両者は同一資料であると判断できる。「蘇陽町野田先生預かり」とされる資料が熊本県に収納された際、あるいはその後の保管時などに何らかの行き違いや混乱があり、「蘇陽町」という誤った出土場所（自治体名）がラベルに記されてしまったのだと思われる。

この推測が認められるとすれば、同じ「蘇陽町野田先生預かり」とのラベルが付されたそのほかの資料も高森町高塚横穴群出土遺物である可能性がきわめて高いと推測できる。以下に述べるように、鉄鎌の型式においても、高塚横穴群出土遺物と判断してなんら矛盾は生じない。刀子なども含め、銹化の様子も、以前に報告した高塚横穴群出土遺物〔杉井編2019〕と酷似している。

こうしたことにより、これまでは「蘇陽町野田先生預かり」として保管されてきた資料であるが、今後は「高森町高塚横穴群出土遺物」として扱われるべきであると考ええる。ただし、本稿では、従来の確実な高森町高塚横穴群出土遺物〔杉井編2019〕との混同を避ける目的から、「蘇陽町野田先生預かり」とされてきた資料については「推定高森町高塚横穴群出土遺物」のように「推定」を冠して記すことにしたい。（杉井）

3. 推定高森町高塚横穴群出土遺物の様相

1 短甲

（1）資料の内容

短甲片のうち、明確に部位が確認できる破片として、右前胴右脇下半部の破片1点、蝶番金具の破片1点、後胴裾板の破片1点がある。（杉井）

（2）右前胴右脇下半部片（図1-1、写真1下段中央および右側）

図1-1は、右前胴右脇下半部の破片である。裾板から下段地板にかけての部分と、それに接合された蝶番板の下半部が遺存する。蝶番板最下部の内面には、後胴裾板右端下部の一部が銹着している。なお、写真1において、写真下段中央の大型破片と下段右側の小型破片は接合していないが、これらは本来接合関係にあり、図1-1は接合した状態で図化したものである。

下段地板 下段地板は、右辺から下辺にかけての部分が遺存している。右辺と下辺の隅角は斜めに裁断されている。下辺左端部にも斜めに裁断された箇所が一部残っている。下辺には裾板との接合に用いられた鉄鉾の鉾脚が3個残るが、それらのうち中央の鉾脚付近の地板下辺に亀裂が生じている。鉾脚を叩き潰す作業時の鉄板への負荷によって生じた亀裂であると推測される。右辺下端部には鉾脚

が1個遺存するが、裾板を避けた蝶番板との二枚留となっている。

裾板 裾板は、曲面で計測して右辺から16cm程度が遺存する。右上隅は角をなす。外面の上辺には幅広の面取りが施されている。上述したように下段地板との接合部には3個の鉄鉾が遺存するが、それらのうち中央の鉾頭は銹に隠れて観察できない。残る2つの鉾をみると、いずれも円頭鉾で、鉾頭径および鉾頭高は順に約1.1cm、約4mmである。

覆輪 裾板の下辺には、鉄包覆輪が取り付けられている。覆輪の折返し幅は7mm程度で、その断面形は丸みを帯びている。

蝶番板 蝶番板は、曲面で計測して下辺から最大16.5cm程度が遺存する。鉄板の左右幅は約6cmである。左辺（図では向かって右側）では鉄鉾が上下2箇所を観察され、上側の鉾は上述した下段地板との接合に、下側は裾板との接合に用いられたものである。下側の鉾の鉾頭は、整理作業時の銹落としの際に誤って削り取られている。上側の鉾をみると、それは円頭鉾で、鉾頭径、鉾頭高は順に約1.1cm、約5mmである。下辺は、銹に覆われているため、その様相が把握できない。高塚不時発見短甲〔杉井編2019〕では、蝶番板上辺の堅上板側に舌状突出部が設けられ、それを内面側に折り返すことによって堅上板との固定がはかられていることが観察されたが、同様の造作がこの下辺にも施されているのかどうかは不明である。また、鉄包覆輪が蝶番板下辺にまで及んでいるのかどうか不明である。なお、遺存部の外面上端付近には、蝶番金具の取り付け痕跡が1箇所認められる。取り付け痕跡の向かって右下角は一部、蝶番板接合用の鉾頭にかかっている。この痕跡から、ここに付された蝶番金具は、一辺3.4cm程度の方角4鉾型式であることがわかる。

付着物 蝶番金具取り付け痕跡には、蝶番に関わる皮革が付着している。また、裾板内面の右辺中央付近には、ほとんど土に帰っているが、繊維の付着が観察できる。繊維の目が粗いため、植物由来の靱皮繊維である可能性が高いが、本来どのような製品であったのかは不明である。

副葬状態の推定 後胴裾板片が蝶番板に並行した状態で銹着していること、銹化の程度が裾板や蝶番板の下辺付近でより顕著であることから、右前胴を閉じた状態、かつ立位で副葬されていたことがわかる。（杉井）

（3）蝶番金具片（図1-2、写真1下段左側）

図1-2は、蝶番金具片である。金具本体板の隅角部分とそこに打たれた鉄鉾1個が遺存している。本体板の厚さは2～3mmである。鉾は円頭鉾で、鉾頭径、鉾頭高は順に0.9～1cm、約3mmである。本体板裏面には皮革と思われる有機物が付着している。とくに鉾脚の周囲では、打ち込まれた鉾脚の輪郭に沿って皮革が押し上げられたような円形痕跡が観察され、その痕跡の中央空白部の直径から、鉾脚の直径は2mm程度であったと推測できる。

なお、上述の右前胴右脇下半部片の蝶番板にみられる蝶番金具取り付け痕跡に、この蝶番金具片を当てはめると、取り付け痕跡の向かって右下角に置いた際がもっとも安定する。完全な密着状態にならない点に若干の不安を残すが、この場所がこの蝶番金具片の本来の位置であった可能性を考えておきたい。（杉井）

（4）後胴裾板片（図1-3、写真1上段）

図1-3は、後胴裾板片である。写真1の上段に示した2つの中型破片が接合する。内面の上端部には、下段地板下辺の小片が銹着している。

裾板のうち、本来の端部が遺存するのは下辺のみである。その下辺の彎曲度を観察すると、外面の

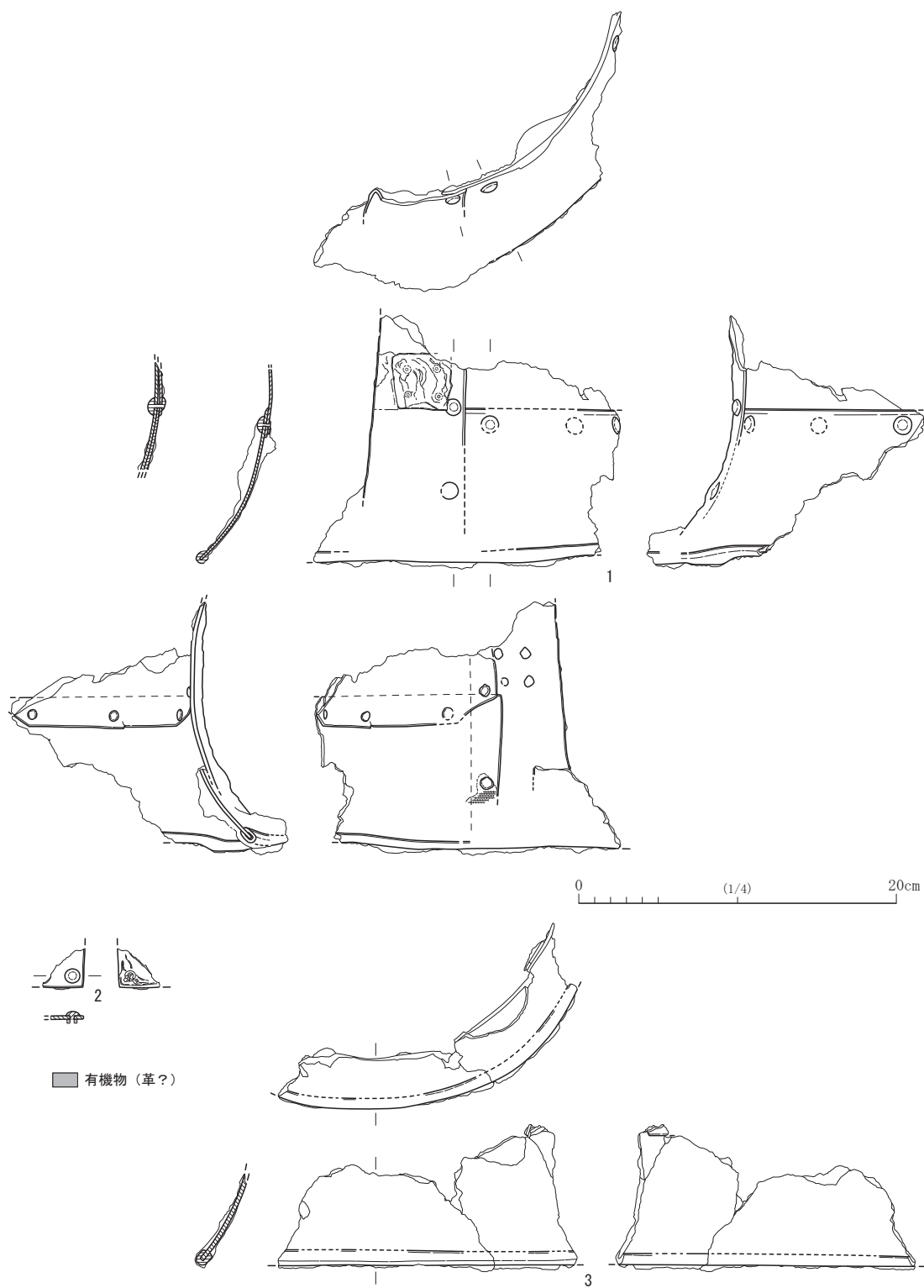


図1 推定高森町高塚横穴群出土遺物の短甲片実測図



写真1 推定高森町高塚横穴群出土遺物の短甲片



写真2 高森不時発見短甲X線CT画像と
推定高森町高塚横穴群出土遺物の短甲片SfM画像の合成画像（外面）



写真3 高森不時発見短甲X線CT画像と
推定高森町高塚横穴群出土遺物の短甲片SfM画像の合成画像（内面）

向かって左側ではゆるやかなカーブを描いているのに対し、右側に向かうにつれてカーブの曲がり度合いが大きくなっていることがわかる。このことから、この裾板片は、後胴の背面部から右脇部にかけての破片であると判断できる。

下辺には鉄包覆輪が取り付けられている。覆輪の折返し幅は8～9mm程度で、その断面形は丸みを帯びている。ただし、銹落としの際に誤って覆輪部分が削り取られているため、覆輪本来の厚みや丸みが大部分で失われている。

(杉井)

(5) 資料の評価

ここで報告した短甲片にみられる特徴、すなわち、地板の隅角が斜めに裁断されていること、裾板の外面上辺に幅広の面取りが施されていること、大型の円頭鋏であること、蝶番金具が方形4鋏型式であること、鉄包覆輪が取り付けられていることなどは、高塚不時発見短甲にみられる特徴と完全に一致する。また、その銹化の様子も酷似している。そして、なによりも、今回示した上記の短甲片は、高塚不時発見短甲の欠損部にちょうど合致する。写真2・3には、高塚不時発見短甲のX線CT画像[杉井編2019: pp.70-71]と今回報告の右前胴右脇下半部片および後胴裾板片のSfM画像を合成して示したが、これをみても、今回報告の短甲片が高塚不時発見短甲の欠損部を補う破片であることがよくわかる。こうした点により、冒頭でも記したように、本資料は高塚不時発見短甲と同一個体であると評価できる。

(杉井)

2 鉄鋏

(1) 資料の内容

鉄鋏は形状が判別できる31点を図示した(図2・3)。出土遺構・副葬位置ともに不明であるため、型式ごとに報告する。型式については、「高森町高塚横穴群出土遺物の調査報告」(以下、高塚報告と記述)[杉井編2019]の分類を参考にする。ただし、高塚報告で分類された長頸柳葉鋏については、刃部形状からさらに長頸柳葉鋏、長頸三角形鋏、長頸腸袂柳葉鋏、長頸圭頭鋏の4種に細分する。

なお、今回報告の鉄鋏にみられる型式の内訳は、長頸柳葉鋏1点、長頸三角形鋏2点、長頸腸袂柳葉鋏3点、長頸圭頭鋏6点、長頸片刃鋏4点、平根腸袂柳葉鋏2点、平根短茎鋏2点、平根圭頭鋏1点である。そのほかに、鉄鋏の刃部片や茎の一部と思われるものもあわせて報告する。各鉄鋏の細部寸法などは表1に示す。

(西)

(2) 各鉄鋏の特徴(図2・3、写真4)

長頸柳葉鋏 図2-1は長頸柳葉鋏である。鋏身関はナデ関、茎関は台形関である。茎部末端は欠損する。

長頸三角形鋏 図2-2・3は長頸三角形鋏である。2は刃部の一部および茎部下半部を欠損する。3に比べ腸袂が深く、長頸腸袂柳葉鋏に分類できそうだが、刃部形状は三角形をなす。刃部に鎬状の面取りが確認できる。茎関は台形関である。3は刃部上半部を欠損する。鋏身関は角関、茎関は台形関である。頸部側面がわずかにゆがむ。

長頸腸袂柳葉鋏 図2-4～6は長頸腸袂柳葉鋏である。刃部はふくらをもち、浅い腸袂を有する。いずれも茎部下半部を欠損するものの、茎関の形状はすべて台形関と思われる。

長頸圭頭鋏 図2-7～12は長頸圭頭鋏である。高塚報告では長頸柳葉鋏との区別がつきにくいために細分されなかったが、本資料の観察で明確に刃部形状の相違を確認できたため、当型式に分類

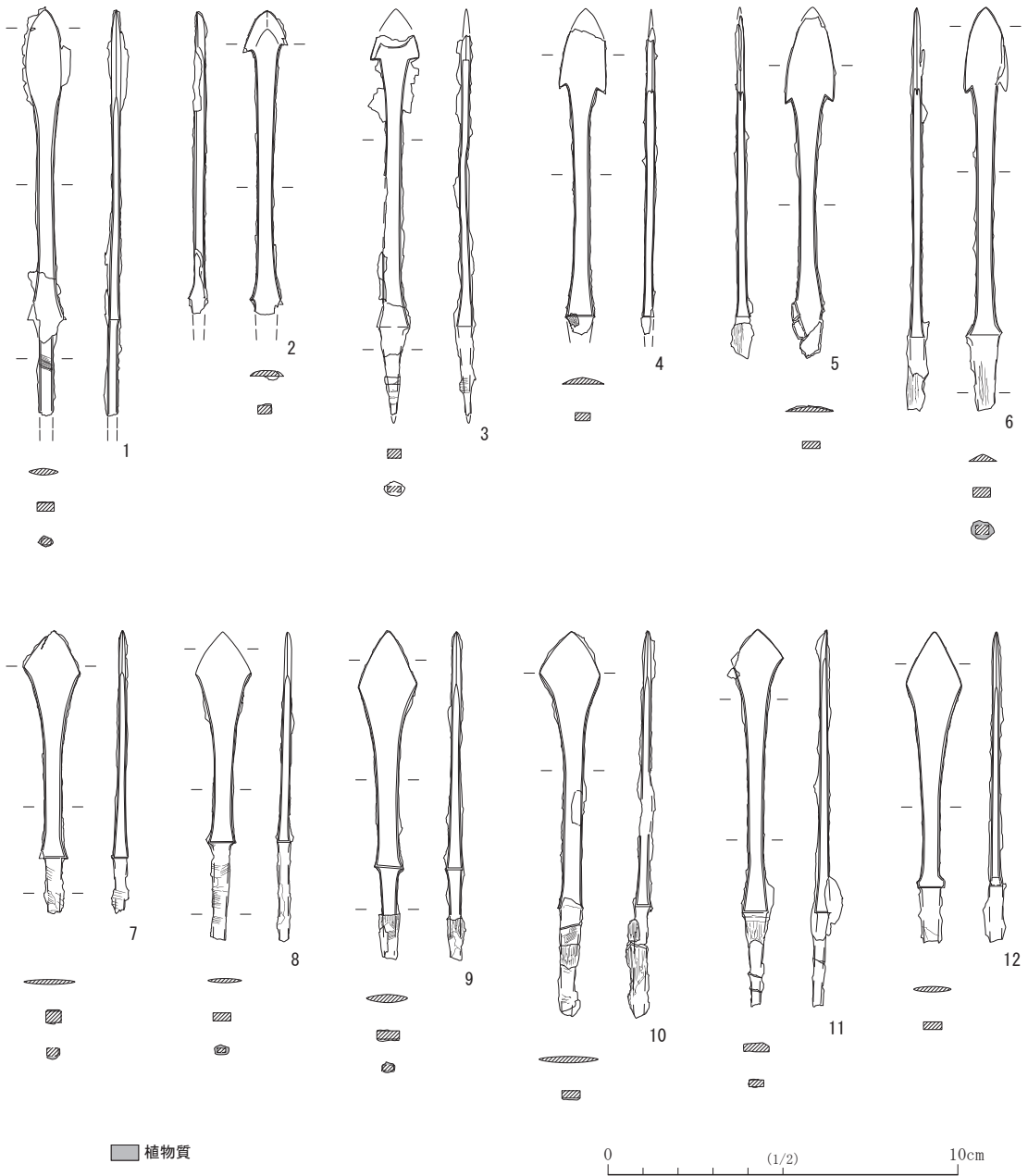


図2 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄鏃実測図(1)

する。7～9は頸部（鏃身下半部）が4.8cm前後、10・11については6.7cm前後と長さに差がある。茎関はすべて台形関である。12は他の長頸圭頭鏃と同様の形状だが、茎関が棘状関である。高塚報告の鉄鏃には棘状関をもつ長頸圭頭鏃は存在しないため単純に比較できないが、後述するように、これは他型式よりも年代的に新しく位置付けることが可能である。

長頸片刃鏃 図3-13～16は長頸片刃鏃である。13は鏃身部のみが残存するが、他の長頸片刃鏃

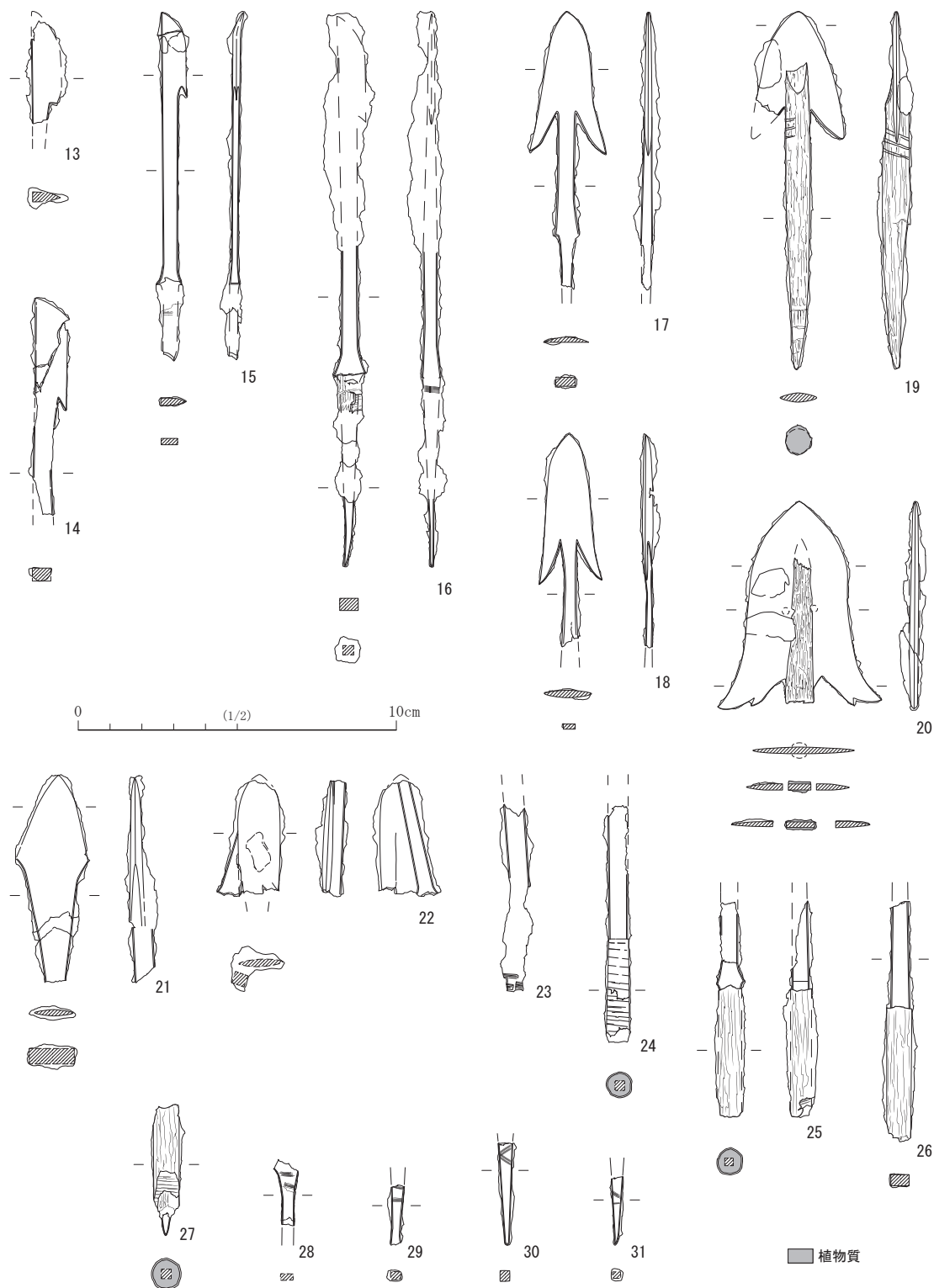


図3 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄鋸実測図(2)



写真 4 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄鏃

表 1 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄鏃計測表

図番号	型式（部位）	全長	部位寸法					関部形状	
			鏃身～頸長	鏃身部長	鏃身部幅	頸部長	茎部長	鏃身部	茎部
1	長頸柳葉	(11.635)	8.980	2.696	1.116	7.056	(2.257)	ナデ	台形
2	長頸三角形	(8.635)	8.256	1.504	(1.106)	7.202	(0.379)	角	台形
3	長頸三角形	(10.872)	8.250	0.730	1.390	7.520	(2.622)	角	台形
4	長頸腸挟柳葉	(8.752)	8.256	1.659	1.336	6.597	(0.496)	腸挟	台形？
5	長頸腸挟柳葉	(9.768)	8.572	(2.471)	1.374	6.101	(1.196)	腸挟	台形
6	長頸腸挟柳葉	(11.483)	9.281	2.225	1.116	7.056	(2.257)	腸挟	台形？
7	長頸圭頭	(8.005)	6.433	2.529	1.554	3.904	(1.572)	ナデ	台形
8	長頸圭頭	(8.799)	6.036	2.568	1.490	3.468	(2.763)	ナデ	台形
9	長頸圭頭	(9.352)	6.834	2.587	1.556	4.247	(2.518)	ナデ	台形
10	長頸圭頭	(11.035)	7.882	2.098	1.660	5.842	(3.095)	ナデ	角？
11	長頸圭頭	(10.798)	7.933	2.283	(1.240)	5.660	(2.865)	ナデ	台形
12	長頸圭頭	(8.839)	7.301	2.998	1.552	4.303	(1.538)	ナデ	棘
13	長頸片刃	(3.125)	(3.125)	2.307	(1.254)	—	—	角	—
14	長頸片刃	(6.807)	(6.807)	3.102	1.253	(3.702)	—	腸挟	—
15	長頸片刃	(10.910)	8.577	2.617	0.837	6.354	(2.129)	腸挟	台形
16	長頸片刃	17.485	11.427	—	—	—	6.058	腸挟？	台形？
17	平根腸挟柳葉	(8.743)	—	4.460	2.438	—	—	腸挟	台形
18	平根腸挟柳葉	(6.643)	—	4.584	1.354	—	—	腸挟	—
19	平根短茎	(11.198)	—	—	2.380	—	—	—	—
20	平根短茎	6.370	—	—	5.152	—	—	—	—
21	平根圭頭	(6.529)	(6.529)	2.903	(3.626)	—	—	ナデ	—
22	鏃身部・頸部？	(3.655)	—	—	—	—	—	—	—
23	頸部～茎部	(5.857)	—	—	—	(5.857)	—	—	—
24	頸部～茎部	(7.496)	—	—	—	(4.202)	(3.294)	—	角
25	頸部～茎部	(6.747)	—	—	—	(2.642)	(4.105)	—	台形
26	頸部～茎部	(7.543)	—	—	—	(3.352)	(4.191)	—	—
27	茎部	(4.068)	—	—	—	—	(4.068)	—	—
28	茎部	(2.030)	—	—	—	—	(2.030)	—	—
29	茎部	(1.878)	—	—	—	—	(1.878)	—	—
30	茎部	(3.156)	—	—	—	—	(3.156)	—	—
31	茎部	(2.109)	—	—	—	—	(2.109)	—	—

※（ ）は残存値、「—」は不明値、「？」は推定を示す。単位はcm。

に比べ、腸挟が明瞭でない点の特徴である。14は鏃身部から頸部上半部のみが残存する。15は棟が直線的で、腸挟は比較的深い。台形関である。刃部の先端が若干折れ曲がる。16は鏽に覆われるものの、長頸片刃鏃と判断できた。15に比べ大型であるが全体形状は共通する。

平根腸挟柳葉鏃 図3-17・18は平根系の腸挟柳葉鏃である。ともに腸挟は深く、弧を描き外反する。17は茎関が台形関であり、欠損のため不明だが全体形状の共通性から18も台形関を有していたと推定できる。高塚報告の1号墓第2屍床出土のものと形状が酷似する。

平根短茎鏃 図3-19は根挟みの残存する平根短茎鏃である。腸挟を有する。無茎鏃の可能性もあるが、繊維状の有機物による緊縛が腸挟付近にみられるため、茎と根挟みを接続していると判断し、短茎鏃に分類した。刃部はふくらを有し、腸挟との境はゆるやかである。木製の根挟みが残存する。

図3-20は重腸挟をもつ短茎鏃である。刃部は緩やかなS字を描く。重腸挟は浅く、内彎して茎へ至る。鏃身部には根挟みが残存し、鏃身中央に根挟みを挟んで2箇所穿孔部をもつ。緊縛のための糸などは見受けられない。

平根圭頭鏃 図3-21は平根圭頭鏃の刃部から鏃身下半部へかけての破片である。鏃身は途中で割れており、茎を欠損する。鏽化の進行により鏽に覆われ、細部の形状は観察できないが、切先が先鋭化し、刃部関を有するという特徴は、古墳時代中期後半以降、南九州に出土が集中する圭頭鏃に多

くみられるものである。

(西)

(3) 鉄鏃片の特徴 (図3、写真4)

鏃身部片 図3-22は柳葉形の鏃身部片に長頸鏃の頸部片が銹着するものである。全体が銹に覆われ、細部の形状が判然としない。鏃身部片にわずかが確認できる凹みから、平根系の腸扶柳葉鏃の鏃身部である可能性が指摘できる。頸部片は断面方形をなし、若干残る関部から想定すれば台形関と考えられる。

頸部～茎部片 図3-23～26は長頸鏃の頸部から茎部にかけての破片である。鏃身部の形状は不明である。24～26には茎卷や矢柄の木質が残存する。24は角関、25は台形関である。23・26の関形状は判然としない。

茎部片 図3-27～31は茎部の破片である。いずれも表面に茎卷の痕跡が残る。 (西)

(4) 資料の評価

今回報告した推定高森町高塚横穴群出土遺物中の鉄鏃は、いずれも高塚報告に記載された鉄鏃に酷似する。とくに、長頸主頭鏃や頸部の短い長頸腸扶柳葉鏃は、高塚横穴群出土の鉄鏃と共通している。

一方で、高塚報告に示された鉄鏃のなかにみられず、本鉄鏃群にのみ確認できるものとして、棘状関を有する長頸主頭鏃 (図2-12) と刃部が短く明瞭に腸扶をもたない長頸片刃鏃 (図3-13) があげられる。棘状関はTK43型式段階に普及するとされる [水野2003]。また、時期が新しくなるにつれ、長頸片刃鏃の腸扶が浅くなる傾向にあるとされ [津野・内山2017: p.72]、明瞭に腸扶をもたないものの存在は本鉄鏃群中の新しい要素と評価できる。

本報告の鉄鏃群は高塚横穴群出土と判断しても矛盾はないものの、高塚報告中で指摘された時期よりも新相の特徴をもつ鉄鏃を含む点には注意しなければならないだろう。 (西)

3 弓金具 (両頭金具) (図4、写真5左2列目下2段)

弓金具を3点図示した (図4)。各部位の名称については、三好栄太郎の検討を参考にした [三好2009: pp.207-218]。

1は2点の弓金具が連なって残存する。2点とも片側を欠損する。1Aは残存長3.63cmを測り、折り返し部が一部残存する。1Bは残存長1.87cmを測り、折り返し部を欠失する。2点とも頭部は不整形円形であり、軸部の断面形は円形である。この2点を結ぶ木質部は、弓幹が遺存したものと考えられる。

2は片側の頭部・折り返し部を欠損する。芯金具の残存長は3.05cmであり、軸部の断面形は直径0.5cmの円形である。頭部は不整形円形を呈する。欠損するものの、折り返し部の痕跡が残っている。 (西)

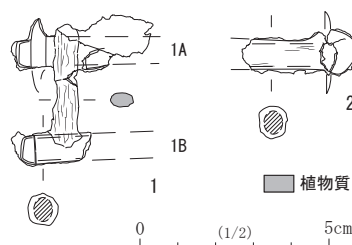


図4 推定高森町高塚横穴群出土遺物の弓金具 (両頭金具) 実測図

4 鉄刀 (図5、写真5中央および右2列)

図5は鉄刀である。残存長31.75cm、残存最大幅2.75cmを測る。全体的に銹化の影響が少なく、鉄刀としての形状をよく残している。刀身は断面三角形の平造りで、切先にはふくらをもつ。背関はもたず、刃部関は一部欠損するものの、遺存状況からナデ関であると思われる。刃部は欠損のため不明

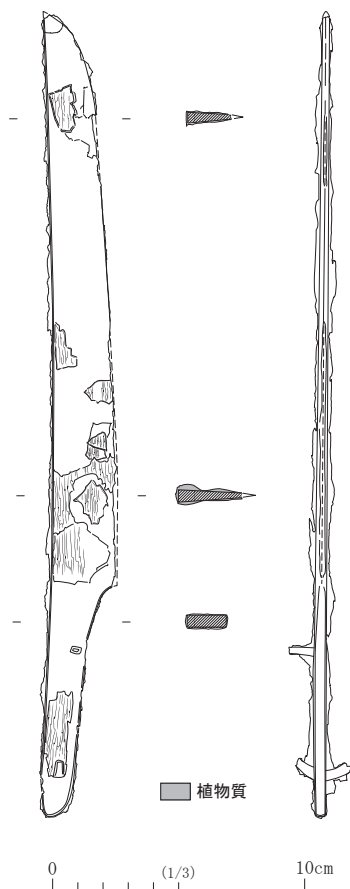


図5 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄刀実測図

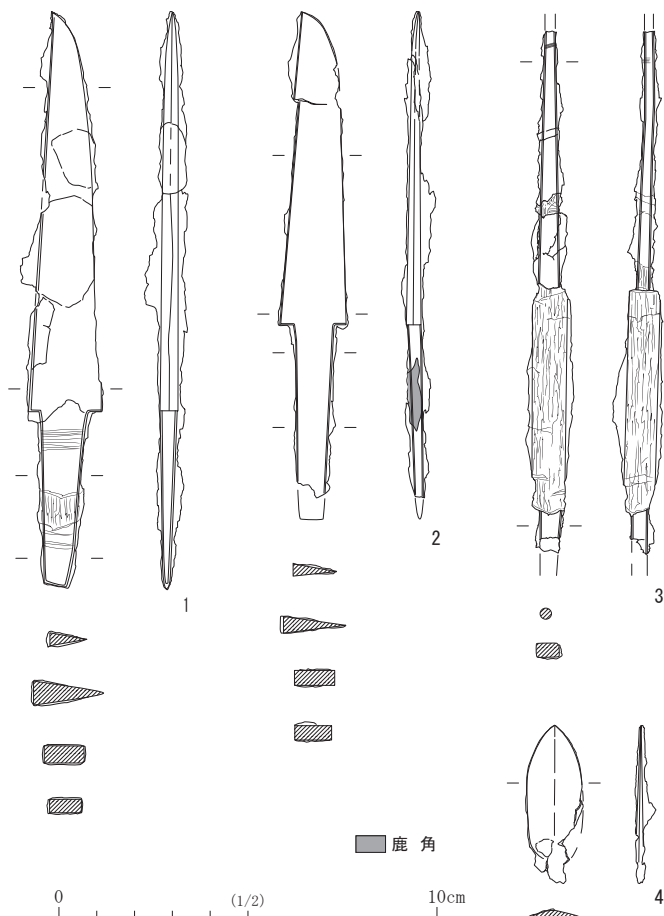


図6 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄製工具実測図

瞭だが、弧を描きながら切先へ収束する。茎は内彎気味に徐々に幅を減じ、茎尻は丸く収まる栗尻である。茎の先端寄り中央、および刃部隣寄りに目釘孔が2箇所確認できる。目釘孔には目釘も残存しており、茎尻側の目釘は貫通した状態である。刀身や茎には、その長軸に平行するように木質が付着しているため、木製の鞘や把が装着されていたことがうかがえる。

今回は図示しなかったが、鉄製刀剣の一部と思われる鉄片を10点程確認した（写真5の右2列）。錆化が進行し、いずれの鉄片も層状に剥離している。また、互いに接合しないため、同一個体であるのかどうか不明である。一部木質が付着しており、鞘などの木製装具の存在がうかがえるが、どのような形状であったのか判然としない。

（西）

5 鉄製工具（図6、写真5左1列目および左2列目上2段）

（1）資料の内訳

刀子2点、錐状鉄製品1点、鉈刃部片1点を確認した。

（西）

（2）資料の特徴

刀子 図6-1の刀子は残存長15.23cmの完形品である。刃部は直線的であり、切先付近でわず



写真5 推定高森町高塚横穴群出土遺物の鉄製工具・弓金具（両頭金具）・鉄刀

かにふくらむ。棟側も直線的である。両関であり、茎は茎尻へ向かい徐々に幅を減じる。茎尻の形状は若干傾くものの一文字尻である。茎には繊維状の有機物が下巻きされたのち、木製の柄が装着された痕跡が残る。図6-2は残存長12.83cmで1よりも小ぶりである。しかし、直線的な刃部と棟部、両関である点は1と共通する。茎は関側から幅を減じる。茎尻を欠損する。1のように繊維や木質は確認できないものの、鹿角が茎側面に付着するため、鹿角装であったと判断できる。これら2点の刀子は寸法に若干の差異があるが、各部形状に類似性をもつ。

錐状鉄製品 図6-3は錐状の鉄製品である。残存長13.78cmを測る。身部は断面円形をなす。柄部には木質が残存する。先端および下端部を欠損するため、詳細な形状は不明である。

鉞(刃部) 図6-4は鉞の刃部片である。残存長4.15cm、厚さ0.2cmである。形状は幅広の柳葉形を呈し、裏すきをもたない。非常に薄手であり、鐮状の面取りがみられる。(西)

(3) 資料の評価

刀子については、高塚報告で示された高塚横穴群出土遺物同様に両関かつ直角関である点が共通するため、本資料群を高塚横穴群出土と判断しても資料的な矛盾はみられない。錐状鉄製品に関しては、出土例・検討例ともに少ないため、詳細を判断し得ない。鉞は、裏すきの不明瞭化が古墳時代中期後葉以降の特徴とされているが〔平井2021〕、茎部や装具を欠失する本資料にその時期的評価を適用することに躊躇を感じる。

総じて資料的な評価を行うことは困難だが、高塚報告で示された高塚横穴群出土遺物中に刀子以外の鉄製工具が確認できない一方、本資料群中に錐状鉄製品や鉞が存在することから、高塚横穴群にはこの種の鉄製工具が副葬された未知の横穴があった可能性が考えられる。(西)

4. まとめ

熊本県文化財資料室で「蘇陽町野田先生預かり」として保管されている古墳時代武器武具資料を調査・検討した結果、上述のように、それは熊本県高森町高塚横穴群で出土したものであると判断するに至った。そのもっとも大きな根拠は、「蘇陽町野田先生預かり」資料中にある短甲片が、高森町高塚横穴群で不時発見された横刃板鋌留短甲(高塚不時発見短甲)に接合すると認めたことである。これを手がかりとして、同じ「蘇陽町野田先生預かり」とされるそのほかの鉄鏃や弓金具(両頭金具)、鉄刀、鉄製工具も高森町高塚横穴群出土品であると推測した。

高森町高塚横穴群1～3号墓は、1988年6月、熊本県教育庁文化課の野田拓治氏によって発掘調査がなされた。また、1988年の調査以前に横刃板鋌留短甲が高塚横穴群で不時発見され、しばらく地権者宅で保管されていたが、その後、野田氏が自宅に預かり、整理作業が行われていた。しかし、1988年調査出土資料についても、また不時発見の短甲についても、正式な報告がなされないまま時間が経過し、2013年12月、野田氏が逝去されるに至った。

私(杉井)は、これら高塚横穴群出土遺物は、熊本県地域のみならず、当該地域と近畿中央政権との関係や、九州島の東西南北を結ぶルートを考察するうえできわめて重要な資料になりうると考えた。そこで、2014年度採択の科学研究費による調査・研究テーマの1つとして当資料を取り上げ、2019年、報告書にその研究成果をまとめた〔杉井編2019〕。この調査・研究の過程で、1988年調査時作成の実測図や写真が野田氏宅で発見されるという出来事もあった。

今回、「蘇陽町野田先生預かり」資料が、いつごろどのような経緯で熊本県に収納されたのかを調

べたが、熊本県にもその記録が残されていなかったため、詳細を明らかにすることはできなかった。しかし、野田氏が高塚横穴群の調査に密接に関わっていたことも念頭に置けば、「蘇陽町野田先生預かり」資料を野田氏が熊本県に持ち込んだことは間違いないだろう。すなわち、ラベルのなかでは「野田先生預かり」の箇所は確かであると考えられる。それにもかかわらず、そこに何らかの手違いがあり、「蘇陽町」という誤った自治体名が付されてしまったのだと思われる。

「蘇陽町野田先生預かり」資料、すなわち「推定高森町高塚横穴群出土遺物」は、資料の管理を厳格に行うことの重要性を示している。もし、本資料群中の短甲片と高塚不時発見短甲との接合関係を認めることができなかつたら、「蘇陽町」には短甲を出土した未知の古墳があったと判断されることになる。現に、私は、2019年12月開催のシンポジウムで、そのような趣旨のことを発言している[杉井2021：p.39]。それは誤りであった。

「蘇陽町野田先生預かり」資料の調査成果としてもっとも大きいのは、それが高塚横穴群出土遺物であると推定できたことである。そして、そのことにより、高塚横穴群には、弓金具や錐状鉄製品、鉈が副葬された未知の横穴が存在した可能性を指摘できたことも重要な成果である。

2019年発行の高塚報告[杉井編2019]のなかで、「発掘調査された横穴は3基であるが、野田拓治氏が『三基を調査し、さらに数基の存在を確認した』と記していることから[野田2007：p.104]、少なくとも5基以上で群をなしていたと思われる。発掘調査の実施以前に短甲が不時発見された横穴の存在も念頭に置けば、もう少し基数が増える可能性がある」と記したが[杉井編2019：p.79]、今回の検討により、その蓋然性がより高まったといえるだろう。

さて、かねてから指摘されていることであるが、熊本県には未報告の古墳出土資料がまだ数多く残されている。公表されない資料は存在しないに等しい。私にできることには限りがあるが、今後も機会をとらえて整理、報告し、資料の共有化をはかりたいと思う。

(杉井)

なお、本稿は、執筆者の1人杉井健が研究代表者である日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B（2021-2024、21H00596）の研究成果の一部である。

謝辞

資料の借用および調査において、以下の諸機関、諸氏から格別のご高配をいただいた。記して感謝申し上げます。

熊本県教育庁文化課、熊本県文化財資料室、渡邊文雄、野田民子

引用・参考文献

- 杉井 健編 2019「高森町高塚横穴群出土遺物の調査報告」『古墳時代阿蘇ルートの研究－阿蘇地域に築かれた古墳に着目して－』2014年度～2017年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、熊本大学文学部：pp.7-88（熊本大学学術リポジトリ <http://hdl.handle.net/2298/42101>）
- 杉井 健 2021「中通古墳群と阿蘇の古墳時代」『中通古墳群を考える－長目塚古墳の温故知新－』長目塚古墳発掘調査70周年・県史跡指定60周年・出土品熊本県重要文化財指定記念シンポジウム記録集、阿蘇市教育委員会：pp.32-45（全国遺跡報告総覧 <https://sitereports.nabunken.go.jp/115207>）
- 津野 仁・内山敏行 2017「武器・武具・馬具」『モノと技術の古代史』金属編、吉川弘文館：pp.55-97

- 野田拓治 2007「古墳時代」『白水村史』白水村史編纂委員会：pp.86-120
- 平井洸史 2021「古墳時代鉋装具の基礎的検討」『技と慧眼－塚本敏夫さん還暦記念論集－』塚本敏夫さん還暦記念論集事務局：pp.55-66
- 水野敏典 2003「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』第8回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料、東北・関東前方後円墳研究会：pp.29-41
- 三好栄太郎 2009「両頭金具の構造と奈良県における出土例」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部：pp.207-218（熊本大学学術リポジトリ <http://hdl.handle.net/2298/30130>）
- 三好栄太郎 2015「南九州における古墳時代中期の腸挟柳葉鏃」『Archaeology from the South』Ⅲ、本田道輝先生退職記念論文集、本田道輝先生退職記念事業会：pp.233-245

挿図・写真・表出典

図1：杉井健作成

図2～6：西貴史作成

写真1・4・5：杉井健撮影

写真2・3：杉井健作成（杉井編2019掲載の図72・73に今回報告した短甲片のSfM画像を合成した。杉井編2019掲載の図72・73は橋本達也氏から提供を受けた）

表1：西貴史作成